随想

阿蘇の女

竹崎深江

糸子は日傘を挿して夏草の茂げる野道をいそいそと歩いてくる。すざましい噴煙をあげる阿蘇の遠景がテレビに映ってドラマ「阿蘇の女」がはじまる。

放送の何日も前から「九月十九日（木曜）RKK午後十時『阿蘇の女』と書いて貼り、家族みんなでその日を待った。ところが丁度その夜は部落婦人会の集りをすることになり、どうなることかとはらはらしたが、時間までに切りあげて解散することができた。会員にも大いにPRし見るように奨めた。

あの、ドラマでの熊本弁が私自身が喋っているよう、アクセントまでそっくりで恥しく、それでも「ばってん」や「○○ばい」等がふんだんに使われ、阿蘇の風景が映るたびに、胸が踊りおかしくも慕（いとほ）しく思われた。

先ほど、阿蘇町立図書館長より我々グループの読書会のテーマを「阿蘇の女」にしてはと連絡があったが、この機会に阿蘇で生まれ育った女性のほんとうの姿、心意気を解明することは嬉しいことである。

祖母と母邑と（市原悦子）娘糸子（松坂慶子）の三代三人の女性が強い激しいそれぞれの生き方の中で胸のおくに沸ぎる同じ御神火の如く燃える情熱と諦めは、これからの筋書がどう発展していくかは知らないが、やっぱり阿蘇の女には違いないと思った。願わくば「何がわたしが悪かこつのあるね。」と言いきれる、誰もが納得のいく、ちょっぴり悲しくも美しい情けある終末に是非して欲しい。

阿蘇は三ヶ月余も本格的な噴火活動を続けているが、その表情は敵かに重々しく、噴出する赤黒きヨナは日々里を被い観光業者は勿論、麓の農林産物に甚大なる被害を齎している。併し誰が心から阿蘇を憤り誹（そし）り憎んでいるだろうか。私共を育くみ、私共の心に生きている阿蘇、春は遠くかすみ、夏は岩肌を剝き出して聳（そそ）り立ち、秋は澄み渡った大空に紅葉の裾を引いて優雅にそびえ、冬は白銀に包まれ夕映（ゆうば）える姿は昔のままに清らかに、更に外輪山の四季の変化も言うに及はず、高原を縫うスカイラインは菊池渓谷を発し原生林の間を走って大観峯へと北外輪の尾根を行く壮快さ。春りんどうは星のごと足の踏み場もない位咲き乱れ秋りんどうの憂いもなかなかに手折りて花瓶に挿せばいつまでもその風情をとどむる。

過ぐる十月十五日、本県企画課長飯田氏より「熊本県の現況と問題」という講演を聞いて始めて私の目は広がった。

熊本県開発構想の中に阿蘇と天草を結ぶ大観光ルートがあるとすれば、先ず、県民の県政への意識育成、又観光地に於ける具体策の第一に、ひとりホテル旅館、観光施設や整備のみならず住民の全てが郷土愛に徹し、粗朴なひたむきな人情のモラルによって醸し出す特別な、豊かな情緒を自然美とともに訪れる旅人へ送りたいものである。（主婦）

耕治人氏のこと

吉村滋

八代出身の作家の耕治人氏が、昨年の六月久しぶりに帰郷されたときのことだが、阿蘇を見たいという氏の希望で、一日新聞社の車を使って、私が案内役を勤めることになった。

耕氏との関係は、亡くなった父の遺稿詩集を寄贈したことに始まるのだが、それも贈ってから四、五年を経過したある日、突然氏の近刊「詩人に死が訪れるとき」という短編集が贈られてきて、このところ健康を害していて、亡父の詩集への礼状も出さぬまゝ失礼していたことが気になっていたが、やっと本復したので近作を贈るという書面が添えられていた。

私は、氏の人柄にいたく感服した。四、五回文通を重ねていた折りの、耕氏の帰省だった。

泰勝寺跡を案内したあと、車は大津街道の杉並木を走っていた。氏は少年の頃一度だけ阿蘇登山をしたことがあるが、その記憶もほとんど霞んでしまっている

ということで、私は並木の杉は加藤清正が屋久杉を移植したものである、というようなことを話した。話しながら、その知識はバスガイドの説明から借りていることに、私は苦笑をおぼえた。

阿蘇谷にはいって、赤水から車はいよいよ高原の広大な自然の中を縫っていった。朝のうち心配された空模様も、湯の谷のホテルを過ぎる頃から青空をのぞかせて、緑のスロープが柔らかな艶を帯びて輝くのが感ぜられた。

耕氏は帰郷の直前に、「招かれざる客」という作品で、第一回の平林たい子文学賞を受けることが決っていた。受賞式の都合で、かねて予定していた日数を繰り上げて帰京しなければならないのが残念だ。でも賞金五十万円という大金を手にすることは、生れて初めてのことだ。などと氏はつぶやくように話していた。車が阿蘇高原にさしかかった頃から、話は千家元磨のことに移っていた。

「詩人に死が訪れるとき」も「招かれざる客」も、耕氏の師の千家元磨のことを書いた作品である。

「千家先生は……」

と、氏は語り続けていた。「詩人・千家元磨」を書いた頃までは、先生の本当の姿がわからなかった。「招かれざる客」で、どうにか詩人の天衣無縫の真価の一端をとらえることが出来たように思う。

などと語りながら、車窓に映る米塚の美しさに、ほーうと感歎の息を洩らした。

私たちは、やがて中岳の火口縁に立っていた。高所恐怖症という耕氏に、火口壁の見える所まで五、六歩進むように誘った。ギラギラと油ぎった赤襞の中を噴煙が立ちのぼっていた。

「怖いもの、こんなのは初めて見た。いまにも倒れそうな耕氏の腰を支えて早々に私は下山をうながした。そのときである。耕氏は中折れ帽をとると、火口に向って、深々と最敬礼したのである。

（熊日昭和史年表作成委員会事務局長）

嵯峨野の秋と立岡の堤

柿村房

午後十時近くタクシーに乗って行く先を告げると、「今から御旅行ですか。」と運転手に問われた。「修学旅行の見送りですよ。」と答えると、「明星三号ですね。すると明日は京都ですか。秋の京都はいいでしょうね。私も京都が大好きで、郊外を二日間歩いて来ました。洛北の三千院あたりがとても気に入りました。嵯峨野も隅から隅まで歩きたい気がしました。」と言う。かって若い頃京都に遊学?した私も京都の自然を賛美すること人後に落ちないつもりなので、うれしくなり、帰りもこの運転手さんの会社の車を見つけて乗ったほどだった。

生徒達は、出発前の喜びに顔を輝かせながら見送りの私達に「行ってきます。」を連発しつつ明星の寝台車に納まった。この現代っ子たちに京都のよさがわかるだろうか。ましてやバスの車上からかすめて通る嵯峨野の秋など何ということもなく終わりはしないだろうか。とちょっぴり淋しく思った。古典を教える身となった私は今、かって教員生活の乏しい収入から私を京都に学ばせてくれた亡き両親に、改めて感謝の思いがするのである。京都の町をちょっと出るとすぐそこには美しい自然があり、名所旧蹟が待ち受けている。広沢の池で月見をしたであろう王朝貴族を偲び、落柿舎の細道に小さな秋を見つけた喜び、これらは私に何らかのプラスになったと思うのである。

しかし、生徒は古典の授業はあまり喜ばないようだ。「なぜあんなむつかしい学科を習わねばならないのか、現代の生活に何になるのか。」などという質問をする生徒がいる。やはり私の教え方がまずいのかもしれない。

ところが不思議と「源氏物語」になると生徒は熱心になる。

光源氏を通しての恋愛の種々相に興味を覚えるのかもしれないが、源氏物語の底を流れるあのしみじみとした情趣の世界、「もののあわれ」は、現代っ子にも心に通うものがあるのか。やはりここには日本人の心のふるさとがあるように思える。

修学旅行の生徒を送り出した翌日、留守部隊は、宇土駅から歩いてちょうど一時間の地、立岡の堤に遠足に出かけた。久々に秋空の下を歩き、汗ばむほどであったが、緑の中に櫨の紅葉が美しく、さざ波が立つ静かな水面には鴨が点々と羽を休めていた。

しっとりとした落葉を踏み、椎の実を拾った。驚いたことに訪れる人もいない。ただ自然の中に立つものと言えばわが校の生徒ばかりである。これが関東や関西なら日曜ならずともかなりの人出があるはずである。

現代の嵯峨野に失われゆく静かさと素朴さがここにはあった。どうかこれ以上手を加えて自然を破壊することのないように。願わくば、この立岡の堤が静かなたたずまいを何時までも保ちつづけてほしいものである。

峰の上に秋の雲が美しい。

（大江高校副校長）